

「被造物を研究することはできない、
故に、創造主は理解し難い」
—ロモノーソフの頌詩「神の偉大さについての夜の瞑想」と
エンテュメーマによる作品主題の提示—

鳥山 祐介

はじめに

北国の夜空に燦然と現れたオーロラの威容と、この不可解な自然現象を前にした人間の戸惑いを描いた頌詩「大いなる極光に際してめぐらした神の偉大さについての夜の瞑想 Вечернее размышления о Божием величестве при случае великого северного сияния」(1743, 以下「夜の瞑想」と記す)は、詩人ミハイル・ロモノーソフ(1711-1765)の代表作の一つとして知られる。当時のヨーロッパの最先端の宇宙論をはじめ、自然科学者としての彼の知見が反映されたこの作品は、同時に「疑いなく『ロシアのピンダロス』の最も完璧な作品のうちに入るものであり、そこには彼の詩的才能が完全な形で表れている」とも評され、傑作との呼び声が高い。¹ アンソロジーに収録される機会も多く、18世紀のロシア詩の中では比較的よく知られている。

もっとも、これはロモノーソフの個性がゼロから生み出した作品ではない。確かに、この頌詩で描かれるオーロラは、ロモノーソフが生まれ育った北方ロシアで幼少時より目にし、成人後は研究対象とした自然現象である。一方、宇宙の途方もない大きさを前にして実感される「人間の知力の限界」という主題は、啓蒙の時代とされる18世紀のヨーロッパで広く知られたものであった。ラヴジョイはその著名な『存在の大いなる連鎖』の序文で、アレクサンダー・ポープ『人間論』(1733-1734)の一節を引用しつつ、人間の知的慢心への警告が、この時代よく見られたポーズであったことを示す。「もっともらしい謙虚な調子、人間の知力と宇宙との不釣り合いの認識に基づく表面的な謙遜は、18世紀の大半を通じて極めて広く行きわたっていた知的流行のひとつで

¹ Бухаркин П. Е. Риторическое смыслообразование в «Вечернем размышлении о Божием величестве при случае великого северного сияния» М. В. Ломоносова: между однозначностью логики и полисемией языка // XVIII век. Вып. 24. СПб., 2006. С. 39.

あった」。² ロモノーソフが西欧のそうした潮流に通じていたことは確かであろう。³

しかし、ここで一つの疑問が生じる。英仏などであればともかく、ピョートル一世による西欧化の時代からわずか数十年しか経ていない18世紀半ばのロシアにおいて、あえて人間の知力の限界を示すことに積極的な意味はあったのだろうか。近代科学の価値は、当時のロシアでそれほど自明だったのだろうか。

この点について考える上での手がかりとして、本稿ではこの頌詩が史上初めて公にされた場に立ち返ってみたい。実は、この作品が最初に発表されたのは、ロモノーソフ自身の修辞学書『雄弁術指南』(1748)⁴の中の、ある論証法の説明に付された実例としてであった。さらに、そこではこの頌詩の主題が「被造物を研究することはできない、故に、創造主は理解し難い」という一つの命題として定式化されることがロモノーソフ自身によって示され、詩のテキストはその敷衍、展開であるとされた。

1990年代以降にロシア文学研究全般において宗教的テーマへの関心が高まったことを受け、この頌詩に対しても新しい角度からアプローチする試みが増加した。⁵ そのうち本稿との関連でとりわけ注目されるのは、この作品の初出が修辞学書であるという事実、ならびに詩の主題を示す命題の存在に注目したブハルキンの論考である。⁶ これは、創作の修辞学的背景を重視しつつ、同時にテキストの多面的な読みの可能性を

² アーサー・O・ラヴジョイ(内藤健二訳)『存在の大いなる連鎖』筑摩書房、2013年、19-21頁。

³ ロモノーソフが『人間論』に関心を抱き、弟子のボポフスキーによる同作品のロシア語訳を主導したことはよく知られるが、オスポヴァートはこうした点を18世紀前半のドイツでの英詩の流行と結びつけている。*Основат К. Некоторые контексты Утреннего... и Вечернее размышления о Божием величестве* // Study Group on Eighteenth-Century Russia Newsletter. № 32. 2004. С. 43-44.

⁴ 正式な表題は『雄弁術指南。言葉の学問を愛する者のために書かれ、演説及びに詩の両者の雄弁に共通の規則を示す修辞学を収めた第一巻 Краткое руководство к красноречию. Книга первая, в которой содержится риторика, показывающая общие правила обоего красноречия, то есть оратории и поэзии, сочиненная в пользу любящих словесные науки』。

⁵ 例えば、ポープなど汎ヨーロッパ的背景との関連を軸に、初期ロモノーソフの文学的関心と科学的関心の間にこの詩を据えたオスポヴァート、ロモノーソフにおける宗教と科学の問題を扱いつつ「夜の瞑想」にも触れたクライン、エリザヴェータ期における教会文化、正教伝統の再体系化という文脈からこの詩の宗教的背景に注目したレヴィットの研究などが注目される。日本でも平松、三浦がロモノーソフを扱った論考で「夜の瞑想」をその宗教的側面とともに論じている。*Основат. Некоторые контексты Утреннего...; Клейн И. Раннее Просвещение, религия и церковь у Ломоносова // Пути культурного импорта. Труды по русской литературе XVIII века. М., 2005. С. 287-300; Левитт М. «Вечернее» и «Утреннее размышления о Божием величестве» Ломоносова: Опыт определения теологического контекста // XVIII век. Вып. 24. СПб., 2006. С. 57-70; 平松達一郎「ロモノーソフの詩に見る神と自然」『ロシア18世紀論集』第3号、2006年、13-31頁; 三浦清美「ロモノーソフの神、デルジャヴィンの神」金沢美知子編『18世紀ロシア文学の諸相：ロシアと西欧 伝統と革新』水声社、2016年、21-50頁。*

⁶ *Бухаркин. Риторическое смыслообразование в «Вечернем размышлении»*. С. 35-56.

「被造物を研究することはできない、故に、創造主は理解し難い」

示した重要な研究だが、上記の命題に関しては、近代科学の意義の否定につながるものでロモノソフの科学観とは相容れない、という前提に立っている。

これに対し本稿で示そうと試みるのは、「夜の瞑想」のテキストが初出の場において置かれていた文脈が複層的であったこと、この詩に「近代科学の意義の否定」とは別の解釈を与える要素がそこに内在していたことである。そうした要素をブハルキンは精緻な読解を通して詩のテキストの内部に見出したが、本稿ではそれが 1748 年刊行の修辞学書という場の中によりはっきりと認知可能な形で見いだされることを明らかにする。

なお、本稿中のロモノソフの著作の引用は 1950 年代にソ連科学アカデミーが刊行した 10 巻全集を用い、括弧内に巻数と頁数を示す。⁷ 日本語訳は全て筆者による。

1.

頌詩「夜の瞑想」は全部で 8 つの連から成り、それぞれの連が 4 脚ヤンプによる 6 つの行から構成されている。この詩の形式において注目されるのは、アクセントのない詩脚、即ちピリーヒーを含む詩行が極めて少なく、全 48 行中わずか 4 行に過ぎない点である。ジルムンスキーはこの点をロモノソフの初期の詩作の特徴とし、しばしば「夜の瞑想」と並置される頌詩「神の偉大さについての朝の瞑想」の全 42 行中ピリーヒーを含む行が 32 行を占めることを、この詩が「夜の瞑想」と同時期にではなくずっと後に書かれたと推測する根拠としている。⁸

頌詩の第 1 連から第 3 連の主題は果てしなく広い宇宙である。夜が訪れ「星でいっぱい深淵」を前にして呆然とする「我」という存在の卑小さが「大海原の波に浮かぶ砂粒」「万年氷のなかの小さな火花」「強い竜巻のなかの細かな塵」「猛烈な炎の中の羽毛」といったメタファーによって表現される。それに対し、宇宙は「あまたの異なる世界」から成り「人々や時の巡りもそこにはある」という、「いとも賢き者たち」の声が想起される。ここで暗示されるのはコペルニクスの地動説を前提とする当時の先進的な宇宙観、とりわけフォントネルの『世界の複数性についての対話』(1686) の出版によって以後ヨーロッパで広く知られるようになった世界の複数性、即ち宇宙に存在する恒星のそれぞれが太陽系に似た構造を形作っており、その中には地球と同じよ

⁷ Ломоносов М. В. Полное собрание сочинений. М.; Л., 1950-59.

⁸ Жирмунский В. М. Оды М.В. Ломоносова «Вечернее» и «Утреннее размышление о Божием Величестве» (К вопросу о датировке) // XVIII век. Вып. 10. Л., 1975. С. 29.

うに人間の住む世界が存在しているという仮説である。⁹ さらに「神のあまねき栄光によりそこにも同じく自然の力がある」という彼らの声は、ニュートンの万有引力の法則に代表されるように、人間の知覚が直接及ばないものに対しても同じく適用される自然法則の存在や、目に見えないものを理性でとらえることを可能にする手段としての近代科学に対する視点を示している。

第4連ではオーロラの出現を目にした「我」の驚愕と困惑が表現される。「北の方角より空焼けが起こる」「凍った海」「冷たい炎」「夜の地上に昼がやってきた」といった撞着語法的な表現は、バロック的な修辞であると同時に、クラインも述べるように「オーロラについて合理的な説明を与えることができないというロモノソフの認識の核心」に動機づけられたものと考えられる。¹⁰ 第5連から6連にかけて、「我」は「敏きその眼で永遠の法則の書物に分け入る者たち」「物事の小さな微の中に自然の規則を見る者たち」、即ち科学者たちにこの現象の説明を求める。第7連では当時なされていたオーロラの原因についての仮説が列挙されるが、「我」はそれらに納得することができない。第8連では、宇宙の遙か彼方の現象を解明する一方でオーロラのように直接目に見える事象について満足な説明を与えることのできない近代科学への疑念が示される。さらにここでは宇宙の広大さ、創造主たる神の偉大さが修辞疑問を通して称えられ、頌詩全体が締めくくられている。

2.

アカデミー版全集の注釈によれば、「夜の瞑想」の手稿の所在はわかっていない。この作品の執筆年を1743年とする慣例は、ロモノソフ自身の論文「空中の電気現象に関する意見への補説」（1753）の記述を根拠としている。この論文は、オーロラの原因に関するロモノソフの仮説とよく似たフランクリンの仮説が1751年に発表されたことを機に発表されたもので、ここで彼は自説の先行性の傍証として、その内容に基づく詩句を含む「夜の瞑想」が1743年に執筆されたことに言及しているのである。

同じ書簡の中でフランクリンが少し触れているオーロラに関する彼の推測は、私の理論とは全く異なっている [...]。彼はそれがどのように生じるのか明らかにしていないが、私は明瞭に説明している。彼は何の根拠もなしに主張を行なっているが、私は複数の現象を説

⁹ ベルナル・ル・ボヴィエ・ド・フォンネル（赤木昭三訳）『世界の複数性についての対話』工作舎、1992年。

¹⁰ *Клейн. Раннее Просвещение, религия и церковь у Ломоносова. С. 299.*

「被造物を研究することはできない、故に、創造主は理解し難い」

明することで証明している。このため、私の説明が彼の考えを盗んで展開させたものであるかのように考えることは誰にもできないだろう。また前述したように、私がフランクリンの推論を知った時、私のこの結論は既にほとんど出来上がっていた。さらに、1743年に書かれ1747年に「修辞学」の中で印刷されたオーロラについての私の頌詩は、オーロラがエーテルの動きによって生じうるという私の昔からの見解を含んでいる」(3:120-123)

ここで「夜の瞑想」が最初に印刷されたとされている1747年の「修辞学」とは、1748年に刊行された上述の修辞学書『雄弁術指南』を指す。これは、ドイツ留学より帰国したロモノーソフが、1742年より科学アカデミーで詩作と文体論の講義を担当したことを機に執筆した二冊目の修辞学の指南書であった。頌詩「夜の瞑想」は、その第270節で次のような記述に続いて全文が掲載されている。なお、詩の標題は特に掲げられていない。

次のエンテュメーマの中にあるような前提を形成する名辞に関係する何らかの概念を敷衍したものを、根拠の代わりに配することができる。「被造物を研究することはできない、故に、創造主は理解し難い *Тварей исследовать не можем, следовательно, и Творец есть непостижим*」。次の頌詩においてなされているように夜や世界、オーロラについての概念を敷衍することができる。(7:315-318)

「エンテュメーマ」は、アリストテレスにも論じられ古代より知られる論証法の一つだが、常に同じ定義が与えられてきたわけではなかった。¹¹ ロモノーソフがここで念頭に置くのは、「三段論法からどちらか一つの前提が取り去られる」「短縮された三段論法」というクインティリアヌスの時代に優勢となった定義であり、その例として彼は「掟を守る者は皆、神にとってよき者である。故に、徳を有する者は皆、神にとってよき者である」という推論を挙げている(7:156)。これを完全な三段論法に書き直せば、「掟を守る者は皆、神にとってよき者である。ところで、徳を有する者は皆、掟を守る。故に、徳を有する者は皆、神にとってよき者である」となる。ここから第二の前提「徳を有する者は皆、掟を守る」を取り去り、第一の前提（「掟を守る者は皆、神にとってよき者である」）と結論（「故に、徳を有する者は皆、神にとってよき者である」）だけを残したものがエンテュメーマである。

『雄弁術指南』第270節の記述が示すのは、頌詩「夜の瞑想」が「被造物を研究す

¹¹ ロラン・バルト（沢崎浩平訳）『旧修辞学 便覧』みすず書房、1979年、93-95頁。

ることはできない、故に、創造主は理解し難い」というエンテュメーマを展開させたものであるということである。なおロモノソフは同書第 266 節で、三段論法やその不完全な形であるエンテュメーマ等に基づく言説の構成を「1) 第一の前提, 2) それに付随する根拠, 3) (ある場合は) 第二の前提, 4) それに付随する根拠, 5) 結論」と示している (7:311-312)。この解説に従えば、「被造物を研究することはできない」という第一前提と「故に、創造主は理解しがたい」という結論から成る上述のエンテュメーマにおいて、第一前提の根拠を述べる代わりに「被造物」「研究することができない」といった名辞から派生した「夜」「世界」「オーロラ」およびそれらの研究可能性といった概念を敷衍、展開させたテキストが、頌詩「夜の瞑想」であるということになる。

「夜の瞑想」を論じる上でこのエンテュメーマに注目したブハルキンは、「被造物を研究することはできない、故に、創造主は理解し難い」という命題を、宇宙を知り存在の神秘に分け入ることへの情熱を常に抱き、多くの頌詩で科学知の喜びを歌ったロモノソフの世界観と根本的に矛盾したものとする。¹² 一方で、この詩のテキストは撞着語法の多用や最終連における疑問文の使用など、数々の詩的意匠によって多義性、重層性を与えられており、エンテュメーマの単純な論理には収斂されない複雑さをはらんでいるという。¹³ こうしたテキストの丁寧な分析が作品の豊かな理解に資することは疑いない。ただし、エンテュメーマについてブハルキンは表面に現れた文言を字義通り解釈するにとどまっており、この命題があえてエンテュメーマとして示されていることの意義には踏み込んでいない。しかしながら、この作品が初めて公に発表された場が修辞学書であったという事実は、その点の重要性を示唆していると考えられる。

3.

ここで想起したいのは、エンテュメーマという論証法が表面に現れていないもう一つの前提の存在を想定していることである。では「被造物を研究することはできない、故に、創造主は理解し難い」という命題が想定するもう一つの前提とはなにか。それは「被造物を研究すれば、創造主を理解できる」という命題にはかならない。さらに頌詩の文脈に照らせば、それは「科学的手段によって自然を探求することを通して、創造主を理解することができる」ことを意味する。

「夜の瞑想」の隠れた前提ともいえるこの命題は、信仰と科学の間に矛盾が存在し

¹² Бухаркин. Риторическое смыслообразование в «Вечернем размышлении». С. 40.

¹³ Там же. С. 38-51.

「被造物を研究することはできない、故に、創造主は理解し難い」

ないという認識を示している。もっとも、これは当時のヨーロッパでは特に珍しい態度であったわけではない。ヨーロッパの18世紀は啓蒙主義の時代として知られるが、この時代の知識人の中にも宗教を無信仰に置き換えようと望んでいた者はほとんどおらず、科学と哲学は「天地を司るなんらかの神的な存在、ひとつの超自然的な創造主、あるいは設計者、あるいは精神が存在することを暗示している」と大方の知識人が信じていた。¹⁴

さらにここには、人間による自然の探究という、従来教会が教えてきたような聖書や啓示を通じた方法とは別の方法によって神を知ることができるという発想がある。ヨーロッパにおいてしばしば教会による警戒の対象となった近代科学は、必ずしも神や宗教を否定するものではなかったが、近代科学とともに現れた「新しい真理概念」は教会制度の基礎を危うくした、とカッシーラーは述べる。¹⁵ 新たに出現したこの「固有で本源的、自立的な自然の真理」は、神の言葉ではなく神の作った事物に現れ、「自然の筆跡を知りそれを解読しうる者」にして初めて読み取ることができるもので、数と図形によって表記されることで自然の完全さを人間に示す。ケプラーやニュートンをはじめとする近代科学の担い手たちは皆、このような真理概念を共有していた。

「被造物を研究すれば、創造主を理解できる」という命題は、この理念の直截な表現である。英国に発し特にドイツを中心に広まっていた「物理神学」の影響下にあったロモノーソフは、自然を探求しその法則を探ることで人間は創造主の叡智を深く理解できると考えていた。¹⁶ 彼にとって、科学は神への奉仕の手段であり、「真理と信仰は二人の姉妹、一人の至高の親から生まれた娘」という比喩が示すようにそれは信仰と並列される対象であった。¹⁷

一方、ここには別の文脈もあった。神が聖書と自然という二通りの方法で人間の前に姿を現すという考えは、既に聖アウグスティヌスや初期キリスト教徒の著述家に現れており、しばしば「二つの書物」という比喩によって示された。¹⁸ さらに、ルツェヴィチが述べるように東方教父の著作では、世界の中に神の存在を感じることができることがしばしば語られ、人間理性の認識能力も否定されなかった。ロモノーソフは、西方教会の神学者の聖書解釈に批判的であり、例えば彼らが旧約聖書「ヨシュア記」第10章第12節のヨシュアの言葉をそのまま理解し、それ故に地球が静止していると

¹⁴ ロイ・ポーター（見市雅俊訳）『啓蒙主義』岩波書店、2004年、51頁。

¹⁵ エルンスト・カッシーラー（中野好之訳）『啓蒙主義の哲学』（上）筑摩書房、2003年、83頁。

¹⁶ *Клейн. Раннее Просвещение, религия и церковь у Ломоносова. С. 290.*

¹⁷ Там же. С. 292.

¹⁸ ローレンス・W・プリンチペ（菅谷暁、山田俊弘訳）『科学革命』丸善出版、2014年、54頁。

証明したがっているとした上で、ここは人間が理性を用いて解釈すべきであるとしてバシレイオス『ヘクサエメロン』の次の言葉を引いている。¹⁹「実際、『詩編』の中で君が『私は自ら地の柱を固める』[詩 75:4]と言われているのを聞いているとしても、『柱』ということでは地をまとめる力のことが言われていると考えなければならない」。²⁰またロモノーソフは、ダマスコスのヨアンネスを引きつつ「世界の構造についての物理学的な考察は神の賛美となるものであり信仰にとって害ではない」と述べ、バシレイオスを引きつつ偉大な教父たちが「自然を知ることを信仰と結びつけようとした」と述べた。ルツェヴィチはこうした記述を彼の詩、特に「夜の瞑想」の詩行と直接関連付けることができるとする。²¹

聖書と自然を「二冊の書物」とする比喩もロモノーソフの知るところであった。「夜の瞑想」第5連では「永遠の法則の書物」という表現が用いられているが、ここで書物に「分け入る」とされる主体が法則を発見する科学者であることを考えれば、単数形で記された「書物」は自然法則が記された既存の書物ではなく、自然そのものの比喩である。この比喩については、論文「1761年5月26日にサンクトペテルブルク帝室科学アカデミーで観測された金星の太陽通過現象」(1761)においてさらにはっきりと示されている。

創造主は人類に二冊の書物を与え、一冊目で自らの偉大さ、もう一冊では自らの意思を示した。一冊目はこの目に見える世界であり、それは人間が創造主の建造物の巨大さ、美しさ、調和を見ることで、神の全能性を自らに与えられた理解力の程度に応じて認めることができるように創造主によって造られたものである。二冊目の書物は聖書である。そこには我々の救済のための創造主の恩寵が示されている。この預言者や使徒による神の靈感を受けた諸書において、その意味を解き明かし説明するのは偉大な教会の師たちである。一方、この目に見える世界の構造という書物においては、物理学者、数学者、天文学者、そして自然の中に注がれた神の御業を解釈するその他の人々が、もう一冊の書物における預言者、使徒、教会の師と同じ役割を果たしている。もし数学者が神の意志をコンパスで測定しようとするならばかけた事であろう。もし神学の師が天文学や化学を詩篇に従って学ぶことができると考えるのであれば同様である。(4:375)

¹⁹ Луцевич Л. Ф. Псалтырь в русской поэзии. СПб., 2002. С. 251.

²⁰ バシレイオス (出村和彦訳)「ヘクサエメロン (創造の六日間)」上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成 2 盛期ギリシア教父』平凡社、1992年、297頁。

²¹ Луцевич. Псалтырь в русской поэзии. С. 252.

「被造物を研究することはできない、故に、創造主は理解し難い」

このように、エンテュメーマで省略された命題「被造物を研究すれば、創造主を理解できる」は、ロモノソフにとっては西欧の物理神学と東方教会の神学的伝統の双方に連なる内容で、神を理解する手段として科学と聖書を等価視できるという理念を含意していた。これをどのようにして社会に伝えるかは、ロシアに近代科学の成果を根付かせることを目指す彼にとって切実な問題であった。

では、その理念をこのような形で示すことにはどのような意義があったのか。まず考えられるのは、これにより前提の自明性が既成事実として示されることである。バルトによれば、エンテュメーマにおいて省略されるのは「人々にとってその現実性が疑う余地がないように思われ」「単に『精神の中にしまい込まれている』」命題であった。²²「夜の瞑想」が発表された『雄弁術指南』においては、エンテュメーマについての説明の後に命題「被造物を研究することはできない、故に、創造主は理解し難い」がエンテュメーマとして示されており、読者が省略された命題を推定することは容易である。そしてこのことは、命題「被造物を研究すれば、創造主を理解できる」に「徳を有する者は皆、掟を守る」と同じような自明の理としての地位を与えることとなった。

同時に、教会と科学の役割を並べて相対化するこの命題が、「新しい真理概念」の出現を恐れる前者の批判を受ける可能性は十分に想定できた。従って、あえてその明示を避けてエンテュメーマの底に潜ませることが、直接的な検閲を受けにくくする効果を持ったと推測することもできよう。

4.

では、ロモノソフの科学観を伝えるのはこの省略されたこの命題であり、「夜の瞑想」のテキスト及びエンテュメーマの内容はそれと矛盾するものなのか。

レヴィットは、ロシアの18世紀のうちエリザヴェータの治世に始まる時代を「世俗と宗教の和解」期と位置づけ、ピョートル期に後景に退けられた教会文化や正教の伝統が再びロシア文化の中で体系化される時代と見た。²³ ロモノソフも「三文体説」が端的に示すように、教会スラヴ語的な要素を組み込んだロシア語の文章語の体系化を試みるなど、その活動の多くはこの方向性に沿うものであった。

「夜の瞑想」は、近代科学と信仰との接点を主題化した作品であったが、ドロヴァトフスカヤはそのテキストに聖書との呼応が見られる点についても指摘する。特に第

²² バルト『旧修辞学 便覧』、94頁。

²³ Marcus C. Levitt, *Early Modern Russian Letters: Texts and Contexts* (Boston: Academic Studies Press, 2009), pp. 269-293.

2 連に現れる「大海原の波に浮かぶ砂粒」以下、一連の鮮烈なコントラストを含む比喩は、詩篇 1-4, 10(11)-6, 34(35)-5, 82(83)-14, ヨブ記 21-18, イザヤ書 29-5, ホセア書 13-3 との関連が指摘されている。また、最終連で詩人が発する疑問文はヨブ記 38-18, 19, 24, 28, 29, 31 に重ね合わされ、「それらは全く同じ疑問ではないものの同一平面上にあり、同じように好奇心に富む知性、自然やその様々な現象について思いをめぐらせる人間の知性によって発せられている」とされる。²⁴ 近代科学と聖書や啓示を並列する「被造物を研究すれば、創造主を理解できる」という命題が、こうした文脈と合致することも明らかである。

もともと、ロモノソフと教会の間には緊張も生じた。とりわけ大きな事件は、彼の主導により 1753 年に完成していたポポフスキーによるポープの『人間論』のロシア語訳の出版が、1756 年に宗務院の検閲によって禁じられたことであった。²⁵ ポープに影響を与えたフォントネルの『世界の複数性についての対話』のカンテミールによるロシア語訳（1740 年刊）も、同年に宗務院によって「信仰と道徳に反する」として出版を禁止された。²⁶

「夜の瞑想」が発表されたのはこの 8 年ほど前だが、宇宙が複数の世界から成るといふフォントネル的世界観が提示される、この詩の挑発的な性格はロモノソフも認識していたはずである。ラヴジョイが述べるように、こうした考えは「神の受肉やキリストによる救済というドラマは、宇宙に無数に散在する世界のそれぞれにおいて生じているのか」といふキリスト教信仰の中心的教義に関わる難問を西欧で提起したが、²⁷ ロシアにおいても同様の警戒を招くものであったことは疑いない。

確かに、この頌詩で世界の複数性を説くのは「我」ではなく他者たる科学者であり、また作品では彼らの世界についての説明が不十分なことが示されていた。とはいえ、こうした点は必ずしも近代科学そのものへの懐疑を示すわけではない。ここでは「汝の法則 закон はどこに？」（第 4 連）「おお汝ら、敏きその眼で永遠の法則 право の書物に分け入る者たちよ」「物事の小さな徴の中に自然の規則 устав を見る者たちよ」（第 5 連）といったように近代科学の所産である自然法則の存在が繰り返し想起され、その限界が示唆される。一方、カッシーラーが記すように 18 世紀の物理学においては帰

²⁴ Дороватовская В. О заимствованиях Ломоносова из Библии // М.В. Ломоносов. 1711–1911. Сборник статей / Под ред. В. В. Сиповского. СПб., 1911. С. 54.

²⁵ 藤沼貴『近代ロシア文学の原点：ニコライ・カラムジン研究』れんが書房新社、1997 年、562-563 頁。

²⁶ Райков Б. Э. Очерки по истории гелиоцентрического мировоззрения в России. М.; Л., 1947. С. 263.

²⁷ ラヴジョイ『存在の大いなる連鎖』、166-170 頁。

「被造物を研究することはできない、故に、創造主は理解し難い」

納的思考法が優勢となり、「物理学的研究の過程は、上から下へ、つまり公理や原理から事実に至るのでなく、その逆に後者から前者へ進むべき」とされ、ニュートンも万有引力の法則をそれ以上の分析を今後一切許さない究極的な存在とはみなさなかつた。²⁸ 既に発見された自然法則の不備が発見され、新たな実験や経験によって克服されていくことはむしろ科学研究の基本とされたのである。

また、エンテュメーマ「被造物を研究することはできない、故に、創造主は理解し難い」の前半部分に含まれる動詞「研究する *исследовать*」は、現代と同じく18世紀にも完了体、不完了体の両方で用いられていた。²⁹ これを完了体動詞とするなら、エンテュメーマが否定するのは被造物を完全に研究し尽くす可能性であり、被造物の研究という行為そのものを否定しているのではないという解釈が可能となる。その場合、上述のような科学観との矛盾は生じない。同時に、近代科学が与える知の絶対視を戒めるその文言は、18世紀ヨーロッパの自然科学者の平均的な姿勢と合致するものでありながら、頌詩の主題として示されることで、世界の複数性への言及に対して予想される教会からの批判をかわす機能も担い得たと考えられる。

結語

セルマンが指摘するように、ロモノソフは最初の修辞学書である『能弁を好む人のための修辞学指南』（1744）でも、例文を通して社会における科学の重要性を執拗に主張していた。³⁰ 4年後に刊行された『雄弁術指南』、およびそこに初めて掲載された頌詩「夜の瞑想」も、そうした理念を伝える媒体としての役割が与えられていたと推測することは不自然でない。

ただし、この詩において彼はそうした理念を直接述べたわけではない。エリザヴェータ即位後の「世俗と宗教の和解」にあつてロモノソフが腐心したのは、いかにして新しい世界観を正教的な文脈と衝突しないように伝えるかということであつた。この頌詩も教会スラヴ語的な語法や聖書に起源を持つ比喻を用い、「教えてくれ、創造主はどれほど偉大なのか？」という修辞疑問を通して神を称え、さらに「被造物を研究することはできない、故に、創造主は理解し難い」という命題を作品の主題として掲げることによって、旧来の価値観の延長線上に神の前でのあるべき人間の謙讓を説いた。しか

²⁸ カッシーラー『啓蒙主義の哲学』（上）、97-99頁。

²⁹ *Словарь русского языка XVIII века*. Вып. 9. СПб., 1997. С. 145.

³⁰ *Серман И. З. Ломоносов в борьбе с церковью и религией // Русская литература в борьбе с религией*. М., 1963. С. 24.

しながら、自然法則の限界を認識することは同時代のヨーロッパではしばしば自然科学の発展に必要不可欠のステップとされ、さらに作品の主題がエンテュメーマという論証形式に則るものであることに言及することで、読者にはもう一つの前提である「被造物を研究すれば、創造主を理解できる」という命題を得ることが可能になる。近代科学の価値を信仰と矛盾させることなく伝えるこの命題こそ、ロモノーソフが18世紀半ばのロシア社会において何よりも広めたかったものであった。

なお、本稿で考察したのは、あくまで1748年に刊行された『雄弁術指南』という書物の一部分を占める頌詩「夜の瞑想」の意義であり、その文脈を離れたこの作品の解釈ではない。「夜の瞑想」はその後1751年、1758年に刊行されたロモノーソフの作品集にも改訂の上掲載されており、それらが有した意義について論じるには各媒体の性格や、また別の背景を精査することが必要だろう。

Тварей исследовать не можем, следовательно, и Творец есть непостижим:
ода М.В. Ломоносова «Вечернее размышление о Божиим величестве при случае
великого северного сияния» и ее тема, представленная в виде энтимемы

ТОРИЯМА Юсукэ

Ода М.В. Ломоносова «Вечернее размышление о Божиим величестве при случае великого северного сияния» была впервые опубликована на страницах его же пособия по риторике «Краткое руководство к красноречию» (1748). В этой книге, ссылаясь на полный текст своей оды, поэт сформулировал ее содержательную основу таким образом: *тварей исследовать не можем, следовательно, и Творец есть непостижим*. Важно, что приводя это умозаключение, автор определяет его как *энтимему*, т.е. силлогизм, в котором, как правило, одна из посылок опущена. Следует считать, что в данном случае такой посылкой является следующее: *если исследуем тварей, то сможем постигать Творца*. В ней содержится основная мысль Ломоносова о науке в качестве особой формы служения Господу: для него религия сама по себе не притиворечила науке.

Как известно, в оде «Вечернее размышление...» выражено скептическое отношение поэта к ученым того времени, не способным объяснить причины северного сияния. Вышеуказанная энтимема, на первый взгляд, также поддерживает мысль об ограниченности человеческого разума в плане познания мира и его Творца. С другой стороны, европейской физике 18-го века был свойствен эмпирический подход к миру, согласно которому признание ограниченности уже известных законов природы считалось неизбежным этапом для лучшего постижения вселенной. Более того, скрытая посылка, лежащая в основе энтимемы, выдвигает на первый план идею, соответствующую мировоззрению Ломоносова.